

高知県の北海道移民

——その統計的概観——桑原 真人

一、はじめに

周知のように、開拓使・三県・北海道庁の主導下に近代になつて本格的に展開される北海道の開拓は、その前提として「内地」府県からの多数の北海道移民を必要としていた。それは、いうまでもなくこれらの移民に、北海道開拓の基本的労働力としての役割りが期待されていたからである。

さて、こうした北海道移住という現象がもつとも活発にみられたのは、明治一九年（一八八六）の北海道庁設置直後の同二〇年代初頭から、大正時代中期にかけての約三〇年余りの時期であつた。

そこで本稿では、府県からの北海道移住の実態に迫るための一方法として、四国・高知県の北海道移民について取りあげてみたい。同県の北海道移民については、今日の北見市の基礎を築いた北光社や空知支庁管内浦臼町の聖園農場などでそれなりに有名であるにもかかわらず、その全体像についてはほとんど知られていないからである。

二、北海道移民の全国的推移

いま、この北海道移民の全国的推移を把握するために、明治二五年（一八九二）から大正一〇年（一九二一）までの間における北海道への来住者＝移民数を出身地方別に示せば第一表のようになる。明治二

五年以降を表出した理由は、それまで「転籍ノ来住者」のみの調査であつたのが、同二五年からは「寄留者」数を加算するように改められたためである。

さて、この表によれば、二九年間の総来住者数は一八八万七、七〇六人であり、これを出身地方別にみると、もつとも多数を占めているのは東北地方（全体の四〇・三パーセント）であり、次いで北陸地方（同二九・七パーセント）、四国地方（同七・六パーセント）、東海・東山地方（同六・五パーセント）といった順序である。

このうち、上位三地方を中心にその増減状況を図示すれば第一図のようになる。

みられるように、北海道移民の数は日清戦争前後（明治二七―同三一年）、日露戦争終了期（明治三九―同四二年）、第一次世界大戦期（大正四―九年）という三つのピークを形成しながらしだいに増加し、大正八年（一九一九）の九万一、四六五人を最高として翌年からは急減した。そして、北海道移民数が統計上確認し得る昭和一七年（一九四二）にいたるまでの間、若干の増減はあるものの二度と急増傾向に転ずることはなかった（この点は後述）。

また、これを地方別にみると、日清戦争前後の時期には、北陸地方が最高であり、四国地方も増加傾向を示している。しかし、第二のピークを形成する直前の明治三八年にいたって、東北地方の移民が北陸

第1表 来住者の出身地方別人数

年次	東北	関東	北陸	東山・東海	近畿	中国	四国	九州	その他	合計
明治25	16,142	1,682	15,027	1,009	1,926	1,646	4,219	1,057	—	42,708
26	16,659	2,175	16,454	1,876	2,252	3,341	5,170	1,120	—	49,047
27	18,116	2,253	19,108	2,364	2,572	3,654	5,310	1,882	—	55,259
28	18,196	2,040	20,598	3,029	3,797	2,667	7,724	1,620	—	59,671
29	15,545	1,774	19,626	2,259	1,940	2,374	6,114	764	—	50,396
30	16,665	2,004	29,856	4,580	2,323	2,680	4,895	1,347	—	64,350
31	18,804	1,758	27,983	3,566	1,880	3,086	5,595	957	—	63,629
32	12,118	1,734	20,384	3,141	1,810	2,239	2,976	992	—	45,394
33	15,508	1,962	19,332	2,699	1,825	2,115	3,854	822	1	48,118
34	16,896	1,978	19,296	3,159	2,058	1,879	3,976	863	—	50,105
35	14,904	2,032	16,738	2,162	1,745	1,738	3,297	785	—	43,401
36	15,744	2,388	15,915	2,586	1,970	2,078	3,321	940	—	44,942
37	17,085	2,435	17,224	3,160	2,654	2,283	4,300	970	—	50,111
38	20,697	2,413	19,102	4,452	2,866	2,982	4,970	742	—	58,224
39	24,833	2,959	21,208	5,832	3,077	2,606	5,240	1,035	—	66,790
40	31,530	3,296	26,123	5,899	3,007	2,687	6,028	1,166	1	79,737
41	32,279	3,578	24,224	6,794	3,361	2,998	5,944	1,388	12	80,578
42	29,953	3,200	19,297	5,025	2,867	2,845	4,397	1,171	93	68,848
43	26,796	3,207	16,697	3,535	2,148	2,260	3,363	883	16	58,905
44	26,453	4,361	15,076	4,836	2,416	2,661	4,561	1,212	1	61,577
大正1	27,816	3,443	14,725	4,082	2,419	2,751	4,846	1,068	6	61,156
2	29,995	3,949	15,291	4,737	2,607	2,803	5,215	1,558	8	66,163
3	30,740	3,805	13,543	3,970	2,683	2,274	4,069	1,368	61	62,513
4	42,070	5,954	18,470	5,535	3,665	3,286	4,584	2,209	68	85,841
5	34,427	4,767	15,801	4,277	3,008	2,850	4,222	1,386	47	70,785
6	35,403	5,856	15,984	5,134	2,945	2,967	5,456	1,698	115	75,558
7	38,588	5,179	17,803	7,066	3,473	3,629	6,313	1,793	81	83,925
8	42,715	6,235	19,659	6,588	3,872	3,513	6,204	2,081	598	91,465
9	40,126	5,788	16,733	5,134	3,061	2,994	4,446	2,164	90	80,536
10	33,959	5,217	13,796	4,317	2,679	2,401	3,577	1,880	148	67,974
合計	760,762	99,422	561,073	122,803	78,906	80,287	144,186	38,921	1,346	1,887,706
比率	40.3	5.3	29.7	6.5	4.2	4.3	7.6	2.1	0.1	100.0

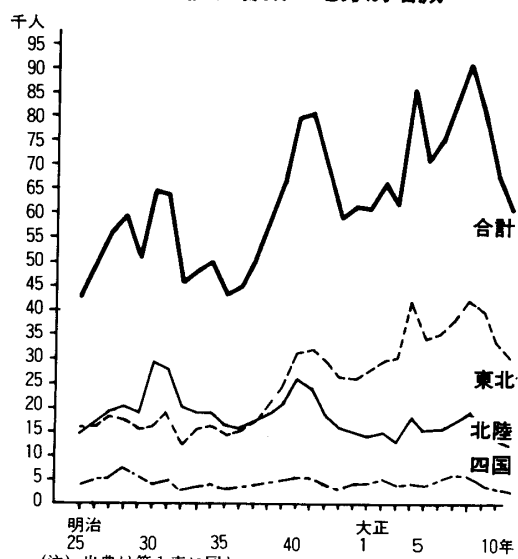
(注) 北海道編「新北海道史」第4巻(1973年)より。

第2表 来住者府県別人口の順位

明19~24	25~29	30~34	35~39	40~44	大1~5	6~10
①青森	青森	石川	富山	富山	宮城	宮城
②新潟	石川	富山	新潟	宮城	青森	秋田
③石川	新潟	新潟	石川	新潟	秋田	青森
④秋田	秋田	青森	青森	青森	新潟	新潟
⑤福岡	富山	福岡	秋田	秋田	富山	山形
⑥山形	福岡	秋田	宮城	石川	福島	福島
⑦岩手	岩手	山形	福島	福島	岩手	岩手
⑧奈良	徳島	岩手	岩手	山形	山形	富山
⑨徳島	香山	宮城	山形	岩手	石川	石川
⑩山口	山形	徳島	福島	岩手	福島	岐阜
⑪富山	宮城	香山	徳島	岐阜	岐阜	岐阜
⑫東京	広島	岐阜	岐阜	徳島	東京	東京
⑬鳥取	兵庫	福岡	香山	香山	徳島	徳島
⑭兵庫	愛知	愛知	東京	東京	愛媛	香川
⑮福岡	東京	鳥取	鳥取	愛媛	香川	愛媛
⑯宮城	鳥取	東京	愛媛	広島	広島	広島

(注) 出典は第1表に同じ。ただし、原表を一部修正の上使用。

第1図 移住者数の地方別増減



(注) 出典は第1表に同じ。

地方を陵駕し、第三のピークである第一次世界大戦期にかけてしだいに増加している。この間、四国地方の移民はほぼ横ばいの傾向にある。

以上の簡単な分析から明らかなように、明治・大正期に著しかった北海道移民の主要な供給源は東北地方と北陸地方であり（この両者で全体の七〇パーセントを占めている）、これに次ぐのが四国地方であったといえる。

次に、北海道移民の出身状況を地方段階から県段階に降って検討してみよう。

第二表は明治一九年から大正一〇年までの一六年間を七期に分け、それぞれの期間内に移民をもっとも多く送り出した上位一六県の順位を示したものである。その上下関係に若干の変動があるとはいえ、上位一〇県以内はほぼ東北・北陸の諸県で占められ、東北の青森・秋田は「初期から一貫して多数をしめ」、宮城・福島は「明治三〇年以後急激に増加し」、岩手・山形は「その中間の動きを示している」。また北陸の石川・福井は「移住の展開も減退もともに比較的早く」、新潟は「終始上位にあり」、富山は「その中間にあつて明治末より急激に減退する」という特徴を示している（北海道編『新北海道史』第四卷（一九七三年）四五四―四五五頁）。

こうしたなかで、とくに四国各県の動向に注目してみると、この表には高知を除く他の三県が登場している。とりわけ徳島は全期間にわたって登場し、初期の中期から後にはやや順位が下がるとはいえ、終始一定の位置を占めており、香川もほぼ同様の傾向を示している。また、愛媛は明治三〇年代後半に登場し、大正初期にかけて増加傾向を示している。

これに対して高知は、前にも触れたように全期間を通じて全く出現せず、他の三県とは極めて対照的な地域であるといえよう。

では、これらの北海道移民はどのような職業を目的として移住してきたのであろうか。

第三表は、明治二二年を除く同二〇年から大正一〇年までの移住者一九三万四、七四七人について、これを農業他六種類の目的別職業に分けてみたものである。

全移住者の四七・五パーセントは「農業」目的であり、「雑業」（二パーセント）と「不詳」（二〇・一パーセント）を除けば、「漁業」（九・六パーセント）、「商業」（六・六パーセント）、「工業」（五・三パーセント）の順となっている。

また、時期別にみれば、「農業」移民は明治二〇年代初頭の四〇パーセント台からしだいに上昇し、明治末期には五〇パーセントを越えている。

一方、「漁業」・「商業」移民は漸減し、「工業」移民が漸増する中で、「雑業」移民がつねに二〇パーセント前後を占め、「不詳」移民も明治末期にかけて急増している点が注目される。

しかし、こうした現象は、「（道内）各地の都市発展によるもの、各地工業の発展及び本道諸鉱山の採掘の増加、各種土木工事、就中鉄道工事の増加等に因由」（北海道庁編『新撰北海道史』第四卷（一九三七年）三四三頁）するものであった。

最後に、道内へ移住した人びとの移住先＝到達国について触れておきたい。

第四表によれば、明治二〇年（一八八七）から大正一〇年（一九二一）までの移住者一九四万四、五九一人のうち、その三三・五パーセントは石狩国に移住し、以下、後志国・渡島国・北見国・胆振国の順となっている。

そして、石狩・後志・渡島・胆振の四国で全移民の七一・一パーセントを吸収しているが、これは、「内地」からの移民にとつて北海道庁とその所在地である札幌といういわば開拓の拠点を擁する石狩地方や、いわゆる「旧開地」に属する後志・渡島・胆振の各地方が、本州方面からみて地理的に近接し、移住に際しても何かと便利であったため

第3表 移住者の職業別人数・同比率

職業	明20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	大1~5	6~10	合計
農業 {人 %	23,319 44.8	104,265 40.6	144,902 53.4	132,508 50.3	192,338 55.8	162,412 46.9	159,298 39.9	919,042 47.5
漁業 {人 %	6,409 12.3	44,738 17.4	35,977 13.3	24,668 9.4	22,590 6.6	30,949 8.9	19,645 4.9	184,976 9.6
工業 {人 %	1,816 3.5	9,444 3.7	9,917 3.7	11,261 4.3	14,849 4.3	24,099 7.0	30,908 7.7	102,294 5.3
商業 {人 %	6,966 13.4	23,462 9.1	18,714 6.9	17,347 6.6	18,526 5.4	17,240 5.0	25,195 6.3	127,450 6.6
雑業 {人 %	13,526 26.0	65,719 25.6	44,990 16.6	47,542 18.0	54,615 15.9	64,243 18.5	114,798 28.7	405,433 21.0
不詳 {人 %	— —	9,455 3.7	17,096 6.3	30,145 11.4	41,727 12.1	47,515 13.7	49,614 12.4	195,552 10.1
合計 {人 %	52,036 100.0	257,083 100.0	271,596 100.0	263,471 100.0	344,645 100.0	346,458 100.0	399,458 100.0	1,934,747 100.0

(注) (1)出典は第1表に同じ。

(2)明治21年を欠く。

第4表 移住者の到達国別人数・同比率

国別	明20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	大1~5	6~10	合計
石狩 {人 %	21,798 35.2	71,103 27.7	77,869 28.7	85,835 32.6	129,187 37.5	121,110 35.0	144,305 36.1	651,207 33.5
後志 {人 %	12,504 20.2	55,491 21.6	49,946 18.4	49,017 18.6	43,919 12.7	32,807 9.5	29,933 7.5	273,617 14.1
渡島 {人 %	13,454 21.7	66,151 25.7	49,676 18.3	41,680 15.8	29,859 8.7	33,559 9.7	36,110 9.0	270,489 13.9
胆振 {人 %	3,420 5.5	14,886 5.8	16,639 6.1	23,294 8.8	45,668 13.3	35,961 10.4	46,469 11.6	186,337 9.6
日高 {人 %	952 1.5	5,518 2.2	5,267 1.9	4,134 1.6	4,481 1.3	4,893 1.4	3,521 0.9	28,766 1.5
十勝 {人 %	88 0.1	3,361 1.3	17,856 6.6	14,644 5.6	20,994 6.1	18,469 5.3	30,801 7.7	106,213 5.5
釧路 {人 %	3,722 6.0	4,432 1.7	6,356 2.3	5,361 2.0	11,080 3.2	13,343 3.9	16,809 4.2	61,103 3.1
根室 {人 %	2,888 4.7	7,102 2.8	3,253 1.2	2,598 1.0	1,730 0.5	4,290 1.2	7,900 2.0	29,761 1.5
千島 {人 %	106 0.2	2,612 1.0	2,587 1.0	3,550 1.4	5,072 1.5	4,817 1.4	2,721 0.7	21,465 1.1
北見 {人 %	1,264 2.0	20,306 7.9	28,636 10.5	13,922 5.3	24,677 7.2	47,850 13.8	53,511 13.4	190,166 9.8
天塩 {人 %	1,676 2.7	6,119 2.4	13,511 5.0	19,436 7.4	27,978 8.1	29,369 8.5	27,378 6.9	125,467 6.5
合計 {人 %	61,872 100.0	257,081 100.0	271,596 100.0	263,471 100.0	344,645 100.0	346,468 100.0	399,458 100.0	1,944,591 100.0

(注) 出典は第1表に同じ。

あろう。

なお、移住先と移住年代とを対比してみると、初期に移民の多かった「旧開地」が、以後にだいに減少傾向をみせるのとは対照的に、十勝・北見等の「奥地」にあつては、明治末期から大正初期にかけて移民が増加しており、「旧開地」から内陸部、さらには「奥地」へという

移民の波の大まかな流れを確認することができる。これは、道路・鉄道といった内陸地方への交通手段がしだいに整備されていったことと関連しているといえよう。

こうした多数の北海道移民の流入は、明治一九年の道内現住戸口六万二、七四五戸・三〇万八、八七一人から、同二九年には一四万九、

全 戸数	国 人口(f)	(e) (f) × 100	(a) (e) × 100	(b) (e) × 100	(c) (e) × 100	(d) (e) × 100
戸	人	%	%	%	%	%
1,209	4,384					
752	2,260					
1,435	4,656					
2,502	9,359					
2,433	9,609					
2,361	7,787					
2,567	8,586	2.56	52.73	2.73	44.09	0.45
3,730	13,118	2.04	90.30	4.48	2.61	2.61
4,460	15,393	1.73	43.82	35.21	11.99	8.99
4,542	15,738	13.61	75.96	9.90	2.80	11.34
11,363	42,708	9.88	45.89	34.08	17.63	2.39
12,767	49,047	10.54	59.48	30.43	4.47	5.63
14,391	55,259	9.61	47.18	33.79	10.96	8.08
15,897	59,671	12.94	28.87	47.62	12.73	10.78
13,199	50,354	12.14	29.31	40.92	16.65	13.12
15,910	64,350	7.61	39.94	32.73	15.34	11.99
13,588	63,629	8.79	31.44	37.52	14.85	16.19
10,140	45,394	6.56	39.99	33.20	13.84	12.97
12,047	48,118	8.01	37.52	36.33	16.66	9.50
13,457	50,105	7.94	38.91	36.07	20.62	4.40
11,642	43,401	7.60	45.50	32.18	14.29	8.04
11,882	44,942	7.39	42.55	26.98	19.09	11.38
13,400	50,111	8.58	44.56	24.33	22.95	8.16
15,133	58,224	8.54	49.44	22.11	21.89	6.56
17,267	66,793	7.85	43.34	28.74	18.47	9.45
21,142	79,737	7.56	43.20	28.45	16.64	11.71
22,215	80,578	7.38	40.21	31.14	19.03	9.62
19,034	63,848	6.89	39.23	29.66	21.56	9.55
17,997	58,905	5.71	44.45	24.41	18.94	12.19
19,182	61,577	7.41	36.61	27.14	25.72	10.52
18,622	61,156	7.92	35.60	24.80	26.89	12.71
19,880	66,163	7.88	33.23	24.76	27.84	14.17
19,518	62,513	6.51	34.28	20.84	28.36	16.52
25,848	85,841	5.34	42.17	25.70	20.11	12.02
20,454	70,785	5.96	34.86	27.71	25.15	12.27
21,168	75,558	7.22	34.29	29.34	26.23	10.14
24,055	83,925	7.52	33.17	34.82	21.15	10.87
25,019	91,465	6.78	31.04	31.46	23.73	13.77
21,111	80,536	5.52	35.25	29.33	19.75	15.68
18,342	67,974	5.26	36.43	26.28	24.21	13.08
15,602	60,412	5.12	34.46	30.52	21.45	13.57
13,942	58,203	4.63	37.68	26.58	22.98	12.77
12,746	56,315	4.17	33.12	29.37	23.58	13.92
13,857	60,104	4.37	32.16	25.69	26.41	15.74
12,507	56,312	3.66	30.47	28.68	23.00	17.86
13,257	57,890	4.37	27.06	25.32	25.83	21.80
11,474	53,931	5.57	32.12	24.23	24.87	18.77
12,617	58,471	4.91	28.81	29.01	22.36	19.82
12,884	60,126	4.44	30.48	26.92	19.54	23.06
12,022	55,630	4.29	31.13	27.94	20.95	19.98
10,781	49,903	4.15	31.46	27.76	23.01	18.27
10,265	48,424	3.93	35.14	25.05	20.06	19.75
12,360	55,093	3.19	24.97	25.77	24.63	24.63
11,141	51,984	3.74	21.71	19.80	22.33	18.72
10,656	48,519	3.46	27.97	24.51	25.88	21.65
11,529	52,306	3.35	29.19	25.43	23.49	21.89
11,187	51,068	3.10	30.66	21.39	29.72	18.23
11,998	54,329	2.87	30.58	26.35	22.95	20.13
13,441	62,097	2.47	29.98	23.78	28.54	17.70
13,837	61,004	2.24	26.79	23.87	30.09	19.25
12,365	58,949	1.99	31.77	27.24	22.63	18.36
802,129	3,144,627	6.10	37.81	29.63	20.36	12.66

三、四国地方の北海道移民

さきに第一表および第一図からも確認したように、四国地方は近代における北海道移民の東北・北陸地方に次ぐいわば第三の供給源として、戸数で七・〇倍、人口では七・六倍にも達していたのである。

一四〇戸・七一万五、一七二人、同三九年には二四万二、八六二戸・一二八万九、一五一人、大正五年には三六万三、二二三戸・一九八万四、五二八人と着実にその数を増加させてゆき、大正一〇年には四四万六五五戸・二三四万一、一〇〇人となり、人口は二〇〇万人をはるかに越えるにいたった。この数字は、三五年前の明治一九年と比較して、戸数で七・〇倍、人口では七・六倍にも達していたのである。

まず第五表は、開拓使時代末期の明治一五年から三県時代を経て北海道庁時代の末期にあたる昭和一七年までの間における北海道移民の推移を、全国および四国各県を対比しながら示したものである。

三県の時期や北海道庁初期の移民統計にやや問題のあることはすでに指摘したが、それにしても、この六一年間の北海道移民の総数は、八〇万二、一二九戸・三二四万四、六二七人という膨大な数にのぼっている。その中で四国地方からの移民の合計は四万九、四一二戸・

第5表 全国及び四国の北海道移民の推移

年次	徳島		香川		愛媛		高知		四国	
	戸数	人口(a)	戸数	人口(b)	戸数	人口(c)	戸数	人口(d)	戸数	人口(e)
明治15	68	215			37	154	11	35		
16	1	2	12	40						
17	33	119			4	19	4	16		
18	36	170			6	17				
19	38	177			6	26				
20	28	104			36	106	3	6		
21	32	116	1	6	30	97	1	1	61	220
22	67	242	8	12	4	7	4	7	83	268
23	43	117	26	94	7	32	9	24	85	267
24	351	1,627	50	212	20	60	59	243	480	2,142
25	410	1,936	336	1,438	197	744	30	101	973	4,219
26	642	3,075	360	1,573	72	231	78	291	1,152	5,170
27	576	2,505	445	1,794	159	582	116	429	1,296	5,310
28	537	2,230	956	3,678	267	983	192	833	1,952	7,724
29	414	1,792	663	2,502	244	1,018	191	802	1,512	6,114
30	471	1,955	427	1,602	257	751	170	587	1,325	4,895
31	435	1,759	536	2,099	221	831	214	906	1,406	5,595
32	280	1,190	250	988	94	412	96	386	720	2,976
33	369	1,446	357	1,400	157	642	97	366	980	3,854
34	412	1,547	395	1,434	221	820	55	175	1,083	3,976
35	412	1,500	284	1,061	116	471	73	265	885	3,297
36	390	1,413	249	896	183	634	109	378	931	3,321
37	502	1,916	287	1,046	220	987	98	351	1,107	4,300
38	607	2,457	287	1,099	261	1,088	109	326	1,264	4,970
39	631	2,271	432	1,506	219	968	126	495	1,408	5,240
40	696	2,604	455	1,715	251	1,003	185	706	1,587	6,028
41	656	2,390	480	1,851	284	1,131	158	572	1,578	5,944
42	513	1,725	342	1,304	225	948	114	420	1,194	4,397
43	457	1,495	276	821	179	637	119	410	1,031	3,363
44	501	1,670	385	1,238	313	1,173	150	480	1,349	4,561
45	488	1,725	350	1,202	346	1,303	167	616	1,351	4,846
大正2	511	1,733	371	1,291	363	1,452	190	739	1,435	5,215
3	400	1,395	278	848	291	1,154	179	672	1,148	4,069
4	560	1,933	341	1,178	251	922	170	551	1,322	4,584
5	404	1,472	316	1,170	283	1,062	139	518	1,142	4,222
6	509	1,871	422	1,601	404	1,431	168	553	1,503	5,456
7	608	2,094	555	2,198	358	1,335	203	686	1,724	6,313
8	516	1,926	538	1,952	370	1,472	214	854	1,638	6,204
9	425	1,567	391	1,304	238	878	192	697	1,246	4,446
10	339	1,303	272	940	219	866	136	468	966	3,577
11	298	1,067	232	945	162	664	100	420	792	3,096
12	263	1,015	197	716	150	619	79	344	689	2,694
13	199	778	176	690	118	554	91	327	584	2,349
14	198	844	165	674	147	693	105	413	615	2,624
昭和1	160	628	148	591	126	474	95	368	529	2,061
2	187	684	156	640	170	653	123	551	636	2,528
3	230	965	184	728	168	747	144	564	726	3,004
4	194	827	188	833	130	642	137	569	649	2,871
5	197	813	192	718	119	521	150	615	658	2,667
6	161	743	163	667	108	500	118	477	550	2,387
7	163	651	130	564	109	476	99	378	501	2,069
8	136	669	110	477	87	382	83	376	416	1,904
9	112	439	110	453	100	433	82	433	404	1,758
10	89	422	86	385	89	434	75	364	339	1,944
11	108	469	105	411	94	434	91	363	398	1,677
12	116	512	111	446	86	412	91	384	404	1,754
13	93	486	81	339	98	471	67	289	339	1,585
14	108	477	100	411	74	358	76	314	358	1,560
15	105	459	74	364	87	437	63	271	329	1,531
16	87	366	83	326	89	411	67	263	326	1,366
17	72	372	74	319	57	265	50	215	253	1,171
合計	18,644	72,470	14,998	56,790	9,781	39,027	6,315	24,263	49,412	191,683

(注)『日本帝国統計年鑑』および『北海道庁統計書』より作成。

一九万一、六八三人であり、これは北海道移民全体の六パーセント弱を占めている。

これを年代別にみてゆくと、すでに前項でも確認されたことではあるが、明治二四年（一八九一）から同二九年までの六年間は、ほぼ四国からの移民が全体の一〇パーセント以上を越えている。しかし、これをピーク以後は緩やかな減少傾向を辿っている。

すなわち、明治三〇年（一八九七）から大正初期にかけては七〇八パーセント台、大正期から昭和初期にかけては三〇四パーセント前後となり、戦前において最後に北海道移民数の判明する昭和一七年（一九四二）には、一・九九パーセントとなって二パーセントを割りこむにいたっている。

以上が、四国地方からの北海道移民の全般的状況であるが、これによっても、四国地方からの移民活動がもつとも活発であったのは、明治二〇年代中・後期の六年間程の時期であったと言える。

次に、四国地方全体からさらに県段階まで降って北海道移民の変遷状況の検討を行なってみよう。

第五表を再び見てみよう。四国からの六一年間の移民総数四万九、四二二戸・一九万一、六八三人のなかで、もつとも多数を占めているのは徳島県の一萬八、六四四戸・七万二、四七〇人であり、次いで香川県の一萬四、九九八戸・五万六七九〇人、愛媛県の九、七八一戸・三万九、〇二七人、そして高知県はもつとも少ない六、三一五戸・二万四、二六三人である。

これを全移民数の構成比でみると、徳島県二二・三七・八一パーセント、香川県二二・六三パーセント、愛媛県二二・〇・三六パーセント、高知県二二・六六パーセントとなっており、徳島県からの移民送出率の圧倒的高さと、これとは全く逆にその三分の一度程度しか移民を送り出していない高知県の存在が、きわめて対照的である。そして、その中間的動きを示すのが香川・愛媛の両県である。

以上のような四国の各県における北海道移民送出状況の地域的相違を確認した上で、これを年次的にその変遷をたどってみよう。

いま第五表のなかで明治二五年（一八九二）から昭和一七年（一九四二）までの五五年間における北海道移民数を、その県別の増減状況を知るために図示すれば第二図のようになる。また、同表において各年次毎に四県の移民数の四国全体に占める構成比を算出したものを、同じく県別に図示すれば第三図のようになる。

この二つの図を一見して指摘し得ることは、まず最初に、四県のなかでも移民送出の形態にほぼ二つのタイプがある、という点である。すなわち第一のタイプは、明治期の日清・日露戦争期にかけて多くの移民を出し、大正中期以降に減少してゆく徳島・香川の両県であり、第二のタイプは、明治後期から大正前半期にかけて徐々に移民を送出し、同じく大正中期以降に減少する愛媛・高知の両県である。北海道移民全体の増減傾向からみれば、第一図からも明らかのようにこの第二のタイプの方が標準的であると言える。しかし、同じ第一図において、日清戦争期の四国地方からの移民数が突出しているのもまた事実であり、それは主として第一のタイプの移民によって形成されたであろうことは言うまでもない。

それとともに、この両図から明らかになる次の点としては、四県の間の移民送出量が、大正末期以降次第に均等化し、昭和期にかけてその傾向が著しい、という点である。

その好例が昭和九年（一九三四）である。この年の北海道移民数は、徳島二四・三九人（四国全体の二四・九七パーセント）、香川二四・五三人（同上二五・七七パーセント）、愛媛・高知二四・三三人（二四・六三パーセント）であり、四県からほぼ同数の移民を送り出しているのである。その後また、四県の間で若干の格差がつき、昭和一七年現在では、四県の移民送出総数に比例する徳島・香川・愛媛・高知の順序になっているとはいえず、明治期に比較すれば四県の間での移民数の格差ははる

かに少ないと言えよう。

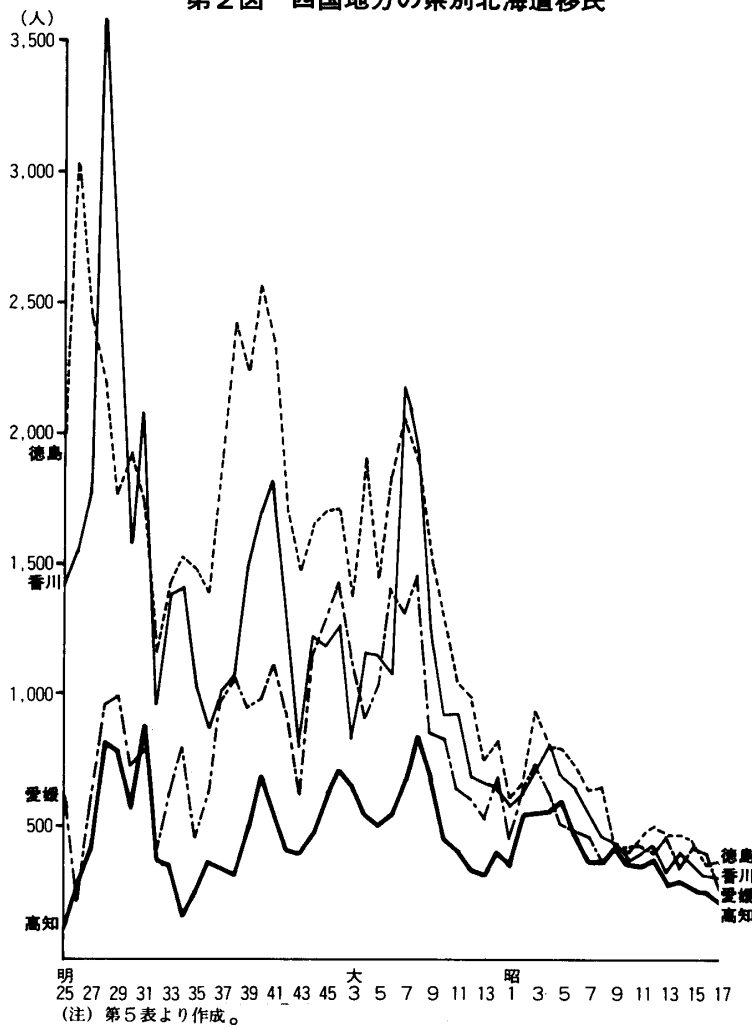
このように、明治期から昭和期にかけて北海道移民全体に占める四国からの移民の比率が初期の一〇パーセント台から徐々に低落するなかで、四県の移民送出量がしだいに均等化するということは、逆に言えば、明治中期に多数の移民を送出した徳島・香川Ⅱ第一のタイプの両県が、その要因とも言うべき県内の社会構造のなかに、標準的な移民送出のパターンを示す第二のタイプの両県とは異なった特質を内包していたことを示唆するものではあるまいか。

次に、第六表は明治二五年から昭和一七年にいたる四県の北海道移民について(ただし、明治二六〜二八、三二年の四年間は不明)、これ

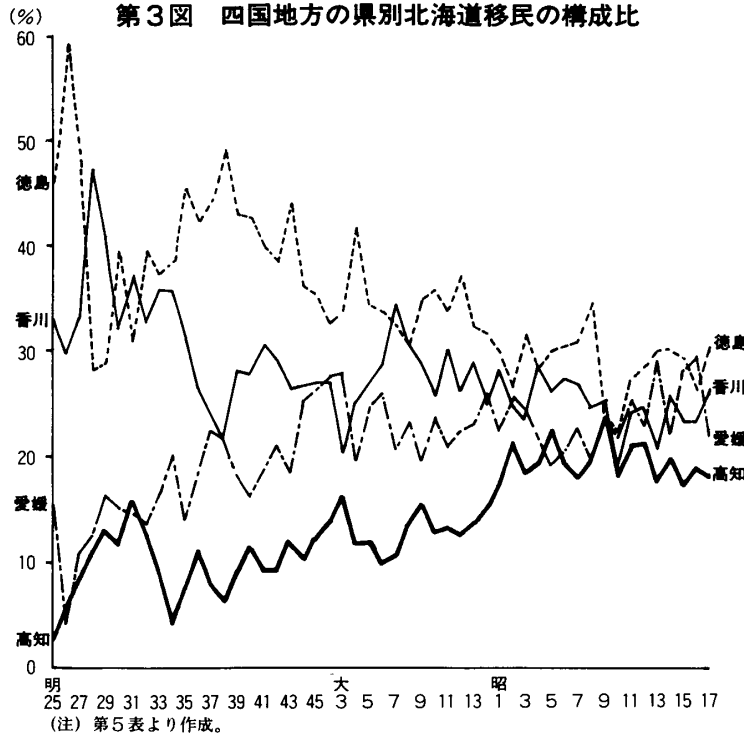
を目的職業別に六種類に分類・表示したものである。
この表においても、前記のようなタイプの違いが明瞭に現われている。

すなわち、戦前の北海道移民の大部分が希望したであろう「農業」の場合、徳島・香川Ⅱ第一のタイプがほぼ七五パーセントを占めているのに対し、愛媛・高知Ⅱ第二のタイプはいずれも六八パーセント台の低い水準である。こうした相違点は、「雑業・不詳」の場合にもみられる。「雑業」者を例にとれば、徳島Ⅱ九・五八パーセント、香川Ⅱ一〇・六三パーセントなのに対して、愛媛Ⅱ一三・三二パーセント、高知Ⅱ一四・八二パーセントとこの両県はいずれも四県の平均値であ

第2図 四国地方の県別北海道移民



第3図 四国地方の県別北海道移民の構成比



る一一・三九パーセントを上廻っている。

また、第七表は、四国からの移民が道内のどのような地域へ移住したのかをみるため、そうした調査の存在する明治四二年（一九〇九）から昭和二年（一九二七）の一九年間に就いて移住先Ⅱ到達国別に示したものである。

この間、徳島は二万六、九二四人の移民を送出し、そのうち一万六八一人（三九・六七パーセント）が石狩国へ移住し、以下、北見（一三・八九パーセント）、胆振（二二・〇八パーセント）、十勝（二〇・五三パーセント）の順となっている。同じく香川からは二万一、三〇三人の移民があり、そのうちの九、〇六七人（四二・五六パーセント）は石狩国へ、以下北見（一五・六七パーセント）、胆振（二三・九八パーセント）、十勝（九・二六パーセント）となつて、徳島と全く同様である。

これに対して愛媛の場合は一万八、二九〇人の移民を送出し、その第一位が石狩国（三九・四五パーセント）である点は徳島・香川と変わりがないが、以下、北見（二二・二四パーセント）、天塩（一五・二五パーセント）、胆振（七・一八パーセント）となつてやや変化がみられる。

さらに高知の場合は、この間の移民一万八七人のうち、移住先の第一位は北見国（三九・一四パーセント）であり、これは他の三県でいえば石狩国に匹敵する数字である。これに就いて石狩（三〇・九七パーセント）、胆振（八・六三パーセント）、天塩（五・五二パーセント）の順となつており、高知県移民の独自の性格を窺うことができる。

これまで四国地方の北海道移民について統計資料による概観を試みるとともに、若干の考察を加えてきた。

それによれば、四国からの移民は、徳島・香川に代表されるタイプと愛媛・高知のタイプとに二分類されることが判明した。

前者のタイプは、移住のピークが日清戦争期をさむ明治二〇～三

〇年代にあり、「農業」目的の移民が多いという特徴を持っている。また、移住先も石狩・北見・胆振・十勝と全く同一地域であり、こうした点からみて、この徳島・香川両県の移民は、きわめて同質性が強いとも言える。

これに対して後者のタイプは、移住のピークがやや遅れて明治末期から大正前期にあり、移住目的では「農業」の比率が低く、「雑業・不詳」の比率が比較的高いという特徴を示している。移住先をみても前者ほどの同質性はなく、愛媛では天塩が第二位を、また高知では北見が第一位を占めるなどきわめて変化に富んでいるのである。

そして、こうした四国における二タイプの移民は、とりわけ昭和期以降北海道移民に占める四国からの移民の比重が低下するなかで、少なくとも移住戸口の上では次第に等質化し、四県ともに八〇戸・四〇〇人前後の幅の中に収斂してゆくのである。

四、高知県の北海道移民

ここでは、高知県の北海道移民の実態究明を中心的課題として取りあげてみたい。

さてこれまでの検討結果から、四国のなかでも高知県の北海道移民がきわめて独自の特徴を有していることが判明した。それは、まず第一に、四県のなかでも移民の送出量がもつとも少なく（例えば、第五表から計算すれば、高知県は移民のもつとも多い徳島県のわずか三・五パーセントしか送り出していない）、次いで第二に、高知県移民の移住先は、圧倒的に道東の北見国に集中し、それに次ぐのが石狩国である、という点である。

因みに、北海道庁拓殖部の広報誌である『殖民広報』第六二号（明治四四年九月発行）には、「各府県移住民概況」(三)として「高知県」が取りあげられ、「本県は従来移住民多からず、四国の四県中常に其末位にあるも時々大なる団体移住をなすことあり。最近十箇年百二十戸四

第6表 移住者の職業別人数・同比率

県別	農業	漁業	工業	商業	雑業	不詳	合計
徳島	人 45,658 75.5%	人 315 0.52%	人 1,171 1.94%	人 2,484 4.11%	人 5,795 9.58%	人 5,051 8.35%	人 60,474 100.00%
香川	36,273 75.00	388 0.80	1,121 2.32	2,007 4.15	5,140 10.63	3,436 7.10	48,365 100.00
愛媛	24,765 68.29	279 0.77	1,296 3.57	1,565 4.32	4,831 13.32	3,526 9.72	36,262 100.00
高知	15,073 68.70	364 1.66	614 2.80	618 2.82	3,252 14.82	2,020 9.21	21,941 100.00
合計	121,769 72.90	1,346 0.81	4,202 2.52	6,674 4.00	19,018 11.39	14,033 8.40	167,042 100.00

(注) (1)「北海道庁統計書」より作成。

(2)明治25年～昭和17年までの数字である。ただし、明治26年～28年、同32年の4年間を欠く。

第7表 移住者の到達国別人数・同比率

県別	石狩	後志	渡島	胆振	日高	十勝	釧路	根室	千島	北見	天塩	合計
徳島	人 10,681 39.67%	人 1,581 5.87%	人 439 1.63%	人 3,253 12.08%	人 238 0.88%	人 2,836 10.53%	人 1,231 4.57%	人 229 0.85%	人 14 0.05%	人 3,741 13.89%	人 2,681 9.96%	人 26,924 100.0%
香川	9,067 42.56	741 3.48	505 2.37	2,978 13.98	73 0.34	1,973 9.26	578 2.71	231 1.08	37 0.17	3,338 15.67	1,782 8.37	21,303 100.0
愛媛	7,217 39.45	727 3.97	660 3.61	1,313 7.18	29 0.16	672 3.67	578 3.16	206 1.13	31 0.17	4,068 22.24	2,789 15.25	18,290 100.0
高知	3,124 30.97	343 3.40	366 3.63	871 8.63	4 0.04	373 3.70	310 3.07	176 1.74	15 0.15	3,948 39.14	557 5.52	10,087 100.0
合計	30,089 39.28	3,392 4.43	1,970 2.57	8,415 10.99	344 0.45	5,854 7.64	2,697 3.52	842 1.10	97 0.13	15,095 19.71	7,809 10.19	76,604 100.0

(注) (1)出典は第6表に同じ。

(2)明治42年～昭和2年までの数字である。

第8表 高知県の北海道移民

都市別	明治37	38	39	40	41	42	43	44	比率	%
高知市	19	34	9	26	6	1	11	15	121	3.64
安芸	29	20	33	67	24	26	5	19	223	6.71
香美	30	3	25	10	5	4	12	3	92	2.77
長岡	17	26	67	38	70	0	30	32	280	8.43
土佐	20	41	18	94	45	9	10	15	252	7.59
吾川	79	53	39	284	43	8	22	38	566	17.04
高岡	155	—	287	876	48	40	133	202	1,741	52.42
幡多	1	25	8	4	0	3	5	—	46	1.39
合計	350	202	486	1,399	241	91	228	324	3,321	

(注) (1)「高知県統計書」より作成。

(2)北海道移住割引券交付者および非交付者の合計である。

百五人にして府県中第二十一位にあり。其移住地は石狩、北見を第一とし胆振、北見の諸国之に次ぐ」と、ほぼ同様の事実が指摘されている。

こうした点を念頭におきながら、高知県の北海道移民の実態について述べていこう。

まず統計上確認しうる北海道移民の実数であるが、それを記載する史料としては、『日本帝国統計年鑑』の「北海道之部」(ただし、大正初期からこの項目は消える)に記載された府県別の移住人員数があり、これはほぼ『北海道庁統計書』の数字と一致する。

これらを整理したものがさきの第五表であり、みられるように明治一五年(一八八三)から昭和一七年(一九四二)までの六一年間に、高知県からは六三一戸・二万四、二六三人の人口が北海道に移住したのである。なお、北海道庁による移民の調査は昭和一七年が最後であるとき述べてたが、正確に言えば、戦後は昭和二三年(一九四八)の調査結果のみが同年度の『北海道統計書』に公表されている。

それによれば、この年に全国から一万五、四二二戸・五万四、九四二人が北海道に移住し、うち四国からは、徳島二六二戸・二三〇人、香川二九九戸・三三〇人、愛媛二七八戸・二九四人、高知二六一戸・二五二人の計三〇〇戸・一、一〇六人が移住している。

また、安田泰次郎『北海道移住政策史』(生活社、一九四一年)によれば、明治一四年(一八八一)に愛媛(香川県を含む)から四戸・一人、高知から三戸・七人の移住があったという(同書、一五一頁)。したがって現在、統計上で判明している高知県の北海道移民の総数は、これらを加算した六、三七九戸・二万四、五二二人ということになる。

以上のような、中央及び北海道側の史料に対して、『高知県統計書』によれば、明治三十七年(一九〇四)から同四四年(一九一一)までの八年間というきわめて限定された期間ではあるが、この時期の北海道移民に与えられた移住汽車賃・汽船賃割引券の交付状況に基づく移民

数の記載があり、それを表示すれば第八表のようになる。

同表の(注)にもあるように、ここに示された数字は、毎年の移住「割引券ヲ受ケタルモノ」と「受ケサルモノ」の合計に当該年の全移住者数のはずである。とするならば、この数字はさきの第五表の数字と一致しなければならない。しかし、実際に両者を照合してみると明らかなように、両者の不一致は甚だしい。

例えば、この八年間の合計は、『日本帝国統計年鑑』によれば、三、七六〇人であるが、『高知県統計書』によれば三、三二一人であり、両者の誤差は四三九人にもほつている。

また、個々の年次でみても、両者の数字が接近しているのは、明治三十七年の三五一人と三五〇人、同三十九年の四九五人と四八六人位のものであり、とりわけ同四〇年の場合は、七〇六人と一、三九九人というきわめて大きくないちがひがある。そして、この年を唯一の例外として、他はおおむね『日本帝国統計年鑑』の方が『高知県統計書』を上廻っている。したがって、後者の北海道移民数は、実際の数字からみてやや控えめであるとはみなければならない。ただし、後者の場合、移民統計が県内の郡市別に示されており、移民送出の基本的要因や地域的相違をさぐる上では重要な史料といえる。

次に、第五表をもとにして、北海道移民全体に占める高知県移民の位置を確定しておこう。

そのために作成された第九表によれば、明治一五年から昭和一七年までの間において、高知県移民が北海道移民全体の一パーセントを越えたのは、明治二四年、二八年、二九年、三一年という日清戦争前後の四年間、明治四五年、大正二年、三年という日露戦争後の三年間、そして昭和三年と五年の二年間であり、それ以外の時期はすべて一パーセント以下である。

北海道移民送出府県の順位でみても、明治一九二九年の間では、二四位、三〇三三九年の間では二二位、明治四〇三三九年の間では

第9表 高知県移民の
全国的位

年次	高知の 全国比率
明治 15	0.80%
16	0.00%
17	0.34%
18	0.00%
19	0.00%
20	0.08%
21	0.01%
22	0.05%
23	0.16%
24	1.54%
25	0.24%
26	0.59%
27	0.78%
28	1.40%
29	1.59%
30	0.91%
31	1.42%
32	0.85%
33	0.76%
34	0.35%
35	0.61%
36	0.84%
37	0.70%
38	0.56%
39	0.74%
40	0.89%
41	0.71%
42	0.66%
43	0.70%
44	0.78%
45	1.01%
大正 2	1.12%
3	1.07%
4	0.64%
5	0.73%
6	0.73%
7	0.82%
8	0.93%
9	0.87%
10	0.69%
11	0.70%
12	0.59%
13	0.58%
14	0.69%
昭和 1	0.65%
2	0.95%
3	1.05%
4	0.97%
5	1.02%
6	0.86%
7	0.76%
8	0.78%
9	0.79%
10	0.70%
11	0.75%
12	0.73%
13	0.57%
14	0.58%
15	0.44%
16	0.43%
17	0.36%

(注) 第5表より作成。

第10表 高知県移住者の職業別人数

年次	農業(人)	漁業(人)	工業(人)	商業(人)	雑業(人)	不詳(人)	合計(人)
明治 19							
20							
21							
22							
23							
24							
25	7	26	8	11	46	3	101
26							
27							
28							
29	589	17	12	31	150	3	802
30	518	24		6	20	19	587
31	864	11	4	9	18		906
32							
33	313	5	5	1	34	8	366
34	131		4	3	19	18	175
35	188	7	12	10	23	25	265
36	317	2	3	10	33	13	378
37	257	4	6	8	37	39	351
38	246	5		9	57	9	326
39	391	13	4	11	59	17	495
40	601	9	7	17	30	42	706
41	443	2	17	28	55	27	572
42	312	3	26	20	47	12	420
43	327	2	4	5	48	24	410
44	396	4	12	13	38	17	480
45	521	16	3	9	36	31	616
大正 2	666	5	6	4	39	19	739
3	519	2	18	26	73	34	672
4	370	4	42	14	59	62	551
5	371	8	19	6	71	43	518
6	429	12	20	16	49	27	553
7	541	1	11	24	76	33	686
8	579	2	46	21	123	83	854
9	425	1	9	28	169	65	697
10	258		5	37	121	47	468
11	216		11	20	93	80	420
12	159	5	34	11	79	56	344
13	155		41	8	76	47	327
14	221	11	10	16	91	64	413
昭和 1	214	20	17	10	61	46	368
2	385	18	12	10	71	55	551
3	430	5	13	5	72	39	564
4	424	18	7	18	76	26	569
5	437	5	16	10	102	45	615
6	316	1	9	8	86	57	477
7	220	10	6	7	89	46	378
8	214	3	11	8	84	56	376
9	217		13	28	53	71	382
10	183	3	10	12	96	60	364
11	177	2	15	12	71	86	363
12	157	12	10	10	93	102	384
13	104	12	3	13	95	62	289
14	109	15	19	15	67	89	314
15	72	15	15	12	100	57	271
16	47	11	23	4	90	88	263
17	37	13	16	4	77	68	215
合計	15,073	364	614	618	3,252	2,020	21,941
比率	68.70%	1.66%	2.80%	2.82%	14.82%	9.21%	100.00%

(注) 出典は第6表に同じ。

は二七位、この間の通算でも二二位という位置を占めるにすぎない(北海道高知県人会『龍馬』創刊号(高知県北海道事務所、一九八五年発行)四九頁)。

こうした点からみて、北海道移民の送出数量はそれ程大きなものが

あるとはいえない。

また、さきの第六表、第七表でとりあげた移民の状況を、再度高知県レベルで表示すれば第一〇表、第一一表のようになる。

まず第一〇表は、高知県移民の目的職業別の一覧表である。明治二

五年から昭和一七年までの間において、みられるように「農業」Ⅱ六・八・七パーセント、「雑業」Ⅱ一四・八二パーセント、「不詳」Ⅱ九・二一パーセント、「工業」Ⅱ二・八パーセント、「漁業」Ⅱ一・六六パーセントの順となっている。

最初は「農業」目的が圧倒的に多いが、昭和に入ると「雑業・不詳」の増加が著しく、とりわけ太平洋戦争開戦前年の昭和一五年以降は、この両者が「農業」を陵駕（りやう）している。

次の第一一表は、明治四二年から昭和二年にいたる間の高知県移民の道内での移住先を示したものである。

北見国への移住が全体の三九・一四パーセントという圧倒的多数を占め、それに次ぐのが石狩国への移住（三〇・九七パーセント）である。この両国への移住を双璧として、胆振国の八・六三パーセントを除けば、それ以外の地域への移住は、平均二・七パーセント弱にとどまっている。

いま、移住時期のパターンをみるため、この第一一表のなかで、合計の部分と北見国、石狩国、胆振国という上位三者の部分について、その変動状況を図示すれば第四図、第五図、第六図、第七図のようになる。

第四図によれば、この間の移住のピークとして大正二年と同八年の二つがあるが、前者のピークは主として北見国への移住者によって（第五図）、また後者のピークは石狩国・胆振国への移住者によって（第六図・第七図）、それぞれ形成されたことを知りうるのである。

では、高知県の移民はそもそも多数を占める北見国のなかでも、一体どのような地域へ移住したのであるうか。

それを窺（うかが）うことのできる史料が北海道庁網走支庁編『網走支庁拓殖概観』（大正六年（一九一七））のなかに収められている。

すなわち、同書の「移住の現況」によれば、「近時移住の最も多きは山形、宮城、福島、岩手、青森、愛媛、の諸県にして愛媛、岐阜、山

形、宮城、香川、富山等の諸県は一時減少の傾向を示したりしも、近く再び増加の趨勢に在り。其他従来より引き続き多数の移住者を出せるは、前記諸県の外愛知、高知、秋田等なりとす」（四二頁）と述べられ、それに続いて大正元年から同五年までの「来住者原籍府県別戸口表」が掲載されている。

この表から高知県移民の分のみを抽出して示せば第一二表のようになる。

すなわち、この五年間で高知県から網走支庁管内に延べ四一八戸・一、五一二人の移民があつたのであるが、各年の数字をさきの第一一表における北見国への移民数と対比してみると、全く同一の大正元年以外でもほとんど一致し、誤差の最高は同四年の一三人である。したがってこれらの数字は基本的に信用し得る、と見てよい。

さて、四一八戸・一、五一二人のうち、その四〇パーセント近い一六四戸・五九九人は渚滑村に移住し、また二〇パーセント弱の七三戸・三三四人が野付牛町へ、さらに一〇パーセント弱の四四戸・一四二人が常呂村へ移住しており、この三町村で全戸数の六七・二二パーセント、全人口の七一・一パーセントを占めている。したがって、この大正期における北見国への高知県移民の大部分は、ほぼ前記の三町村を中心に移住していたものと考えられる。

因みに、同時期の四国の三県からの移民は、徳島Ⅱ二八九戸・九三三人、香川Ⅱ二三四戸・八一四人、愛媛Ⅱ三〇五戸・一、〇七六人であり、戸数・人口ともに高知県が他を圧倒していることを指摘しておきたい。

さらに高知県移民の男女別構成と一戸当り平均人員の推移をみると第一三表のようになる。

まず男女別の構成をみると、明治期においては移民のなかに占める男性の割合がほぼ六〇パーセント台で終始し、大正期に入ると五七パーセント前後、そして昭和期になると五五パーセント程度と次第に低

第11表 高知県移住者の到達国別人数

年次	石狩	後志	渡島	胆振	日高	十勝	釧路	根室	千島	北見	天塩	合計
	人	人	人	人	人	人	人		人	人	人	人
明治42	195	15	5	41	1	4	2		3	126	28	420
43	138	9	13	25		6	5			188	26	410
44	205	20	21	36		6	6		2	135	49	480
45	196	25	6	35			10		6	302	36	616
大正2	147	11	20	57		18	8			446	32	739
3	192	17	17	32		7		10		323	74	672
4	189	4	29	30		6	5	1		225	62	551
5	153	14	30	41		11	6	3	3	246	11	518
6	163	12	17	105		12		2		199	43	553
7	207	24	12	118		25		1		274	25	686
8	298	20	23	98		17	25	21		319	33	854
9	195	8	17	71	1	37	26	23		281	38	697
10	147	27	13	40		27	11	9		163	31	468
11	129	35	24	48		36	9	5		116	18	420
12	112	18	29	11		22	16	2		115	19	344
13	83	25	11	19		25	48	22		94		327
14	123	34	25	38		46	21	16		97	13	413
昭和1	148	16	32	11	1	38	17	18		87		368
2	104	9	22	15	1	30	95	43	1	212	19	551
合計	3,124	343	366	871	4	373	310	176	15	3,948	557	10,087
比率	30.97%	3.40%	3.63%	8.63%	0.04%	3.70%	3.07%	1.74%	0.15%	39.14%	5.52%	100.00%

(注) 出典は第6表に同じ。

第12表 網走支庁管内の高知県移住者

年次 戸口	大正元		大正2		大正3		大正4		大正5		合計		比率	
	戸	口	戸	口	戸	口	戸	口	戸	口	戸	口	戸	口
町村名														
網走町	3	4	3	9	3	17	5	7	3	8	17	45	4.06%	2.98%
美幌町	2	10	3	13	3	7	1	1	1	2	10	33	2.39	2.18
斜里村	—	—	—	—	1	1	3	4	3	7	7	12	1.67	0.79
野付牛町	12	69	29	123	12	64	9	28	11	50	73	334	17.46	22.09
置戸村	—	—	—	—	—	—	4	15	11	45	15	60	3.59	3.97
武華村	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	1	3	0.24	0.20
常呂村	12	33	26	94	—	—	5	14	1	1	44	142	10.53	9.39
佐呂間村	—	—	—	—	21	92	2	5	3	8	26	105	6.22	6.94
上湧別村	9	24	2	8	—	—	3	15	—	—	14	47	3.35	3.11
下湧別村	5	19	5	17	2	3	—	—	2	8	14	47	3.35	3.11
紋別村	3	6	5	11	3	12	11	20	4	12	26	61	6.22	4.03
渚滑村	28	136	41	167	38	116	36	101	21	79	164	599	39.23	39.62
興部村	1	1	—	—	1	1	1	2	3	17	6	21	1.44	1.39
雄武村	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	1	3	0.24	0.20
合計	75	302	114	442	84	313	80	212	65	243	418	1,512	99.99	100.00

(注) 北海道庁網走支庁「網走支庁拓殖概観」(大正6年)63頁より作成。

下し、男女の構成率が徐々に接近していることがわかる。

このことは、いうまでもなく移住の形態が男性単独の移住から家族的挙家移住へと変化していったことの反映であろう。

それは、次の一戸当り平均人員が増加傾向を示していることから確認することができる。

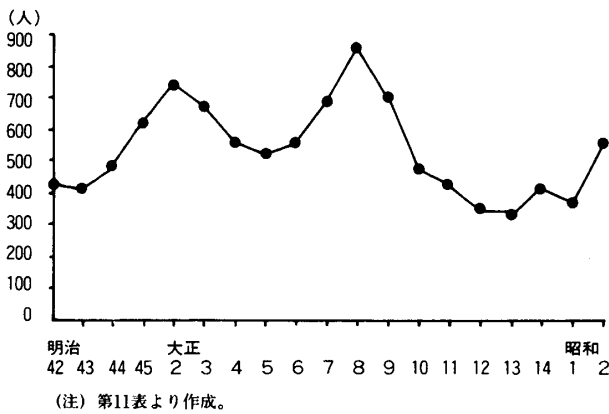
すなわち、明治二〇年代当初はやや不安定であった一戸当り平均人員は、同三〇年代に入るとほぼ三人台で持続している。そして、大正期後半は三人台から四人台への過渡期であるが、昭和になるとやや低下して、おおむね三人前後で推移している。これは、全国的な北海道移民の傾向とはやや反するものであったことは、同表における北海道移民全体の一戸当り平均人員の推移と対比してみても明らかであろう。このような点にも、高知県の北海道移民の独自の性格が示されているのである。

五、おわりに

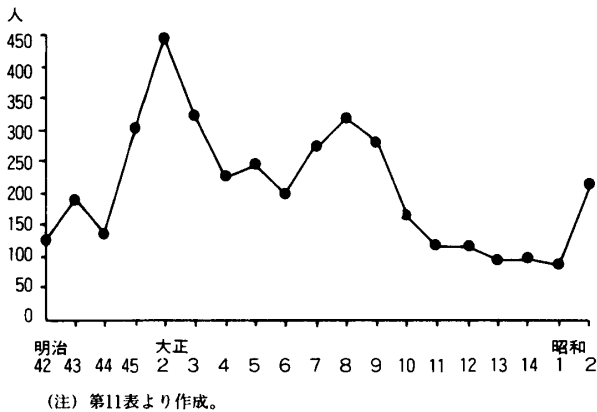
以上、近代における高知県の北海道移民について、その全体像を知るための一助として簡単な統計的概観を試みてきた。この分析からも明らかのように、東北、北陸地方に次ぐ第三の北海道移民送出地である四国地方のなかでも、とりわけ高知県の場合は独自の移民送出パターンを示している。そのようなパターンがなぜ形成されたのか、四国各県の県民性や社会・経済構造の変動とどのように絡みあっているのか、今後究明されねばならない課題は数多い。がとりあえず本稿では、こうした高知県移民の概括的特徴を指摘しておくにとどめたい。

(付記) 本研究は、平成元年度札幌大学研究助成(個人研究)による研究成果の一部である。

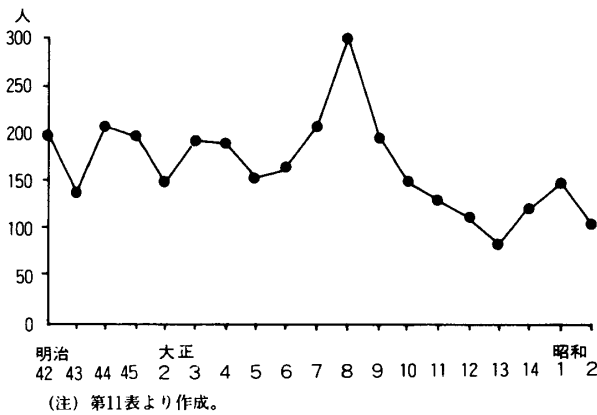
第4図 高知県の北海道移民



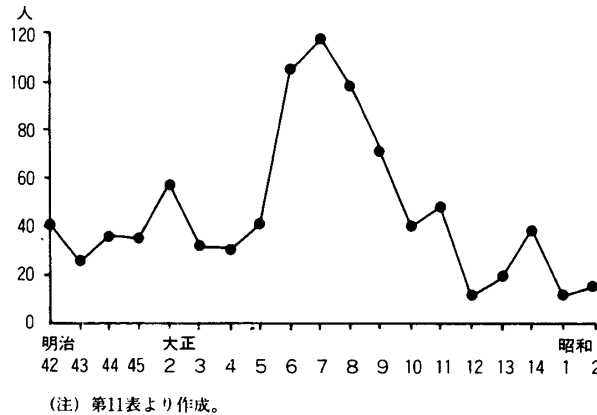
第5図 北見国への高知県移民



第6図 石狩国への高知県移民



第7図 胆振国への高知県移民



第13表 移住者の性別と1戸当り平均人員の推移

年次	高 知						全 国		
	戸数(a)	男 性	女 性	合計(b)	男性比率	(b)/(a)	戸数(c)	人口(d)	(d)/(c)
明治15	戸 11	人 23	人 12	人 35	% 65.71	人 3.18	戸 1,209	人 4,384	人 3.63
16				0			752	2,260	3.01
17	4	9	7	16	56.25	4.00	1,435	4,656	3.24
18				0			2,502	9,359	3.74
19				0			2,433	9,609	3.95
20	3	4	2	6	66.67	2.00	2,361	7,787	3.30
21	1	1		1	100.00	1.00	2,567	8,586	3.34
22	4	5	2	7	71.43	1.75	3,730	13,118	3.52
23	9	13	11	24	54.17	2.67	4,460	15,393	3.45
24	59	141	102	243	58.02	4.12	4,542	15,738	3.46
25	30	69	32	101	68.32	3.37	11,363	42,708	3.76
26	78	182	109	291	62.54	3.73	12,767	49,047	3.84
27	116	265	164	429	61.77	3.70	14,391	55,259	3.84
28	192	462	371	833	55.46	4.34	15,897	59,671	3.75
29	191	490	312	802	61.10	4.20	13,199	50,354	3.81
30	170	359	228	587	61.16	3.45	15,910	64,350	4.04
31	214	501	405	906	55.30	4.23	13,588	63,629	4.68
32	96	222	164	386	57.51	4.02	10,140	45,394	4.48
33	97	196	170	366	53.55	3.77	12,047	48,118	3.99
34	55	108	67	175	61.71	3.18	13,457	50,105	3.72
35	73	152	113	265	57.36	3.63	11,642	43,401	3.73
36	109	215	163	378	56.88	3.47	11,882	44,942	3.78
37	98	186	165	351	52.99	3.58	13,400	50,111	3.74
38	109	197	129	326	60.43	2.99	15,133	58,224	3.85
39	126	289	206	495	58.38	3.93	17,267	66,793	3.87
40	185	402	304	706	56.94	3.82	21,142	79,737	3.77
41	158	328	244	572	57.34	3.62	22,215	80,578	3.63
42	114	232	188	420	55.24	3.68	19,034	63,848	3.35
43	119	250	160	410	60.98	3.45	17,997	58,905	3.27
44	150	301	179	480	62.71	3.20	19,182	61,577	3.21
45	167	365	251	616	59.25	3.69	18,622	61,156	3.28
大正 2	190	408	331	739	55.21	3.89	19,880	66,163	3.33
3	179	390	282	672	58.04	3.75	19,518	62,513	3.20
4	170	336	215	551	60.98	3.24	25,848	85,841	3.32
5	139	290	228	518	55.98	3.73	20,454	70,785	3.46
6	168	338	215	553	61.12	3.29	21,168	75,558	3.57
7	203	407	279	686	59.33	3.38	24,055	83,925	3.49
8	214	502	352	854	58.78	3.99	25,019	91,465	3.66
9	192	414	283	697	59.40	3.63	21,111	80,536	3.81
10	136	284	184	468	60.68	3.44	18,342	67,974	3.71
11	100	248	172	420	59.05	4.20	15,602	60,412	3.87
12	263	197	147	344	57.27	1.30	13,942	58,203	4.17
13	199	187	140	327	57.19	1.64	12,746	56,315	4.42
14	198	238	175	413	57.63	2.09	13,857	60,104	4.34
昭和 1	160	220	148	368	59.78	2.30	12,507	56,312	4.50
2	187	304	247	551	55.17	2.95	13,257	57,890	4.37
3	230	321	243	564	56.91	2.45	11,474	53,931	4.70
4	194	318	251	569	55.89	2.93	12,617	58,471	4.63
5	197	343	272	615	55.77	3.12	12,884	60,126	4.67
6	161	266	211	477	55.77	2.96	12,022	55,630	4.63
7	163	204	174	378	53.97	2.32	10,781	49,903	4.63
8	136	220	156	376	58.51	2.76	10,265	48,424	4.72
9	112	235	198	433	54.27	3.87	12,360	55,093	4.46
10	89	210	154	364	57.69	4.09	11,141	51,984	4.67
11	108	198	165	363	54.55	3.36	10,656	48,519	4.55
12	116	212	172	384	55.21	3.31	11,529	52,306	4.54
13	93	149	140	289	51.56	3.11	11,187	51,068	4.56
14	108	175	139	314	55.73	2.91	11,998	54,329	4.53
15	105	142	129	271	52.40	2.58	13,441	62,097	4.62
16	87			263		3.02	13,837	61,004	4.41
17	72			215		2.99	12,365	58,949	4.77
合計	18,644	13,723	10,062	24,263		1.30	802,129	3,144,627	3.92

(注) 出典は第5表に同じ。